



**⑬ 紅花染め衣装** かめあやおりきぬ  
じつるかめ しょうちくばいふくじゆ も ようあい すみ べにあけほの  
 地鶴亀二松竹梅福寿模様藍二墨ト紅曙  
ぞめおんなちゆうだちいわいぎ  
 染女中裁祝着) [町指定有形民俗文化財]

河北町

紅染の原料として山形から紅花が出荷され、京都で見事な紅花染めの衣装がたくさんつくられた。そのすばらしい衣装が帰り荷として山形に運び込まれた。その一つである本品は元新庄藩の貢献物とされた亀綾織の絹地で、織目が亀甲に見える綾織の祝い着である。亀綾織は白地が普通だが、この祝い着は上身が藍に墨入れ染めされ、中間を微妙なぼかし染めにし、腰下を紅花染めにしている。ぼかし染めの技法を持つ職人は京都でも数人といわれ貴重な衣装である。祝い着にふさわしく紅花染めの部分には、長久を祈念する鶴亀と吉祥の象徴である松竹梅が手書きで描かれている。本品は旧家の夫人が幼少時に着た衣装と伝えられ、当時の山形の紅花商人の豊かさと気品を示している。



**⑭ 紅花染め衣装**  
ようりゅうじょうふ しまがき はるはな も ようあい すみ べに あけほの  
 (揚柳上布地籬二春花模様藍墨ト紅ノ曙  
ぞめひとえおおふりそで  
 染単大振袖) [町指定有形民俗文化財]

河北町

楊柳織上布地という上等の麻布を紅花染めした大振袖である。楊柳織とは、縦の方向にしぼ(しわ)の筋を表わした織物。緯に強燃糸を使い、上下から強く圧縮して縦じわを出す技法でつくられる。この大振袖は、上身が藍に墨入れ染めがされ、腰下は紅花の曙染がされている。曙染とは、白地のままの裾を紅や紫で明け方の空色のようにぼかす染色法で、至難の業といわれる。大振袖の部分には、籬、牡丹・木蓮・桜が手描き友禅の技法で描かれている。本品は、身丈が146cmで、安政4年(1857年)春、旧家の女性が嫁入りの時に持参した品で、当時の豪華な婚礼の様子が伺える。包装紙には「本店小千谷萬国屋仕入」と書かれている。



**⑮ 紅花染め衣装**  
げんろくべにばなぞめ こそで  
 (元禄紅花染小袖)  
 [町指定有形文化財・工芸品]

山辺町

元禄年間、紅花で商いをしていた当地大蔵の稲村七郎左衛門家2代兼安が上方で買い求めた衣装。身丈141cm、袖丈43.0cm、衿60.5cm、肩幅30.5cmの大きさである。美しい紅花を素地にして、金糸銀糸の刺繍で松・桜・梅・竹の模様を盛り上げて立体感を構成した豪華絢爛たるもの。元禄模様は絞り染めと刺繍を主体に自己主張の強い模様を特徴としている。元禄文化は5代将軍徳川綱吉の治世で、上方は新興町人を担い手として大いに商業発展を遂げた。都市の風俗が華やかになり、中でも武家の奥方の正装である小袖は、友禅染が発明されるなどしてより贅をこらし、独特のあでやかさを彩り豪華さを極めた。



## 16 紅花染め衣装

ちりめんべにばなぞめふりそで  
(縮緬紅花染振袖A)

[町指定有形文化財・工芸品]

山辺町

当地の豪農商家であった稲村七郎左衛門家が上方から帰り荷として持ち帰った紅花を使った絹織物で、長年稲村家の家宝として伝えられていた衣装。紅花染めにした縮緬地に、松を遠景に竹と梅を繁茂させて小さく鶴と亀の小動物を散りばめている。上の方では鶴があちこちでのどかに舞い飛び、下の方ではその様子をところどころから亀が見上げて遊んでいる。それらが金糸と銀糸の刺繍で立体感を出して描かれ、さりげない小景を美しく盛り上げている構図は、思わず目を凝らして見てしまいそうである。また、離れて見れば、衣桁に広げられた深い紅色の地に縁起物の松・竹・梅・鶴・亀が絶妙なバランスで配置されていることも息を呑むほどだ。



## 17 紅花染め衣装

ちりめんべにばなぞめふりそで  
(縮緬紅花染振袖B)

[町指定有形文化財・工芸品]

山辺町

前記同様に稲村家に家宝として伝えられたもので、縮緬地を紅花染めにして基調とし、縁起物の鶴と亀が金糸銀糸で刺繍して配置され、両者が巧みにからみあって見事な立体感を出している。上部は多数の鶴が乱舞し、下部には金糸で刺繍されたこれも多数の亀が水面から首を出したり泳いだり自由に遊んでいる。鶴も亀も静かな自然の中で仲良く戯れている様子は、まるで生きているかのように感じられる。紅の強烈な色彩になごやかな小景が浮いて見えるのは、縮緬地と金糸を巧みに活かした表現の成せる技である。なお、所蔵する山辺町ふるさと資料館では、前記2点を含め紅花染め衣装は、紅の退色を防ぐため公開日のみの展示となっている。



## 18 芭蕉の句碑

天童市

元禄2年(1689年)旧暦5月、俳聖松尾芭蕉は「おくのほそ道」で尾花沢から山寺参詣に向かう途中、紅花畑を目にして「まゆは おもかげ べに眉掃きを俤にして紅粉の花」と詠んだ。天童市上荻野戸の「芭蕉おもかげの丘」に句碑がある。当時、旧山寺街道には紅花を栽培する農家がたくさんあった。芭蕉は、紅花の花が化粧の時に女性が使う刷毛(眉掃き)の形に似ていることに気づいて、眉しゅうそんについた白粉を落とす女性の姿を思い描いた。句碑は俳人加藤楸邨まごうの揮毫で、昭和56年(1981年)7月建立。近くの「龍神の里じゃがらむら」と上貫津紅花畑では、毎年、紅花の開花時期に「おくのほそ道天童紅花まつり」を開催。



## 19 紅の蔵及び収蔵資料 (旧長谷川家)

山形市

江戸時代、紅花商人(豪商)として財を成し、山形藩御用商人の「五人衆」に数えられた<sup>㊦</sup>長谷川家の屋敷。通りに面し、2棟の店蔵があり、門を入った奥には母屋の蔵座敷と2棟の土蔵がある。明治27年(1894年)の山形市内の市南大火で焼失、現在の建物は明治34年(1901年)に火災に強い蔵造りとして再建されたもの。故松下幸之助が訪れたという歴史と由緒のある蔵座敷である。欄間には江戸時代に参勤交代の大名行列で使われたと伝えられている槍が残っている。また、嫁入りの打掛が飾られていたり、長谷川家所有の火鉢や箆筒の調度品も、店内装飾や店舗什器として活用している。平成18年(2006年)土地区画整理事業に伴い大改修され、3年後「山形まるごと館・紅の蔵」として山形市街地の新名所として再スタートした。



## 20 芭蕉、清風歴史資料館 (旧丸屋鈴木家住宅)

尾花沢市

元禄2年、紅花の盛期の7月に俳聖松尾芭蕉は、尾花沢に「おくのほそ道」紀行中最長の10日間滞在した。その時に訪問したのが鈴木清風邸。清風は「紅花大尽」と言われるほどの豪商であり芭蕉とは俳諧を通じて親交があった。芭蕉の山寺参詣を勧めたのも清風であった。資料館は、清風邸の隣にあった旧丸屋・鈴木弥兵衛家の店舗及び母屋を移転復元したもので、江戸時代の町屋の姿を留めている。土蔵造りの「みせ」には防火扉の<sup>しとみど</sup>部戸がある。また、母屋は雪国に特有な通り土間を設けた中門造りになっていて、4つの座敷の置き柱を外すと32畳の大部屋になる。どちらも江戸末頃の創建。館内には芭蕉と清風関係の資料を展示。



## 21 紅花資料館及び 収蔵資料(旧堀米家)

[町指定有形文化財]

河北町

江戸時代、紅花商人(豪農)として活躍した堀米家の屋敷。敷地面積は10,269m<sup>2</sup>と広大で、長屋門を構え、堀と塀を設けて座敷蔵・母屋、御朱印蔵、武者蔵などが往時の姿のまま保存されている。また、紅花資料を納めた「紅の館」や紅花染めができる工房、お休み処などがある。特に「紅の館」では、紅花の歴史を始め紅花染めの着物や雛人形・化粧道具を見学でき紅花関係資料の宝庫である。手入れの行き届いた水辺のある庭園には紅花畑が随所に点在し、7月上旬にはゆっくり紅花を愛でながら邸内を周遊することができる。堀米家は江戸末期、167名の農兵を組織するなど地域の治安にも尽力。半日たっぷり楽しめる広さと清々しい景観が魅力だ。紅花を知るためには必ず訪れたい名所である。